

クィア理論とトランスジェンダー

—— 性的差異について ——

田多井 俊 喜

1 問題の所在

近年「トランスジェンダー」「LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）」といった言葉が一般の人々の中でも普及し始めている。本稿で言う「トランスジェンダー」とは、生まれ育てられた性とは異なる性を生きようとする人々全般を指す広義の意味合いを指している。広義の意味とは異なり、「性別適合手術」（昔でいう「性転換手術」）まで受けたいとは思わない人々を指す場合も、「トランスジェンダー」という言葉を使う場合がある（また、「性別適合手術」まで志す人々は「トランスセクシュアル」と呼ばれる）。

「トランスジェンダー」という言葉の普及それ自体はトランスジェンダーの人々にとって悪いことではないのかもしれない。だが、言葉の普及に伴って実際の彼ら彼女らの生活環境が改善の方向に向かっているとは言い難い。トランスジェンダーの望む生活環境とは、「自分の希求する性」で差別されることなく暮らすことである。だが、現代の日本社会はトランスジェンダーを社会に包摂するまでには至っていない。ここで、トランスジェンダーを社会に包摂する試金石となるのが、これらの人々が差別を受けることなく就職でき、また労働できるという点である。

では、近年よく言及されるクィア理論がトランスジェンダーの日常生活の実情や、トランスジェンダーの社会的包摂にアプローチできているかということ、そうではない。

クィア理論は、M. フーコーの系譜学にならった、言説分析を理論的支柱としている。そのため、言説分析という方法論を持つクィア理論がトランスジェンダーにアプローチするとしたら、それまで異端視されていた性のあり方が医療言説によって医療化され、「性同一性障害」という疾患に分類されることで、医療という近代の統治装置に回収される過程を、歴史資料などを用いて明らかにするものと思われるであろう。実際、そういった研究は、後述する B. ハウスマン(1995)のように存在する。こうした言説分析を採った研究は、次のようなメリットを持っている。そのメリットとは、トランスジェンダーの人々の性の

あり方やアイデンティティ、生活世界をインタビューによって明らかにする方法にはないメリットでもある。それは、性というものが医療という統治装置に組み込まれ続けて存在しているということを、歴史的文脈に即して解明するというものであり、マクロ的な視野に立った研究視座を得られるというメリットである。ただ、こうしたクィア理論のもつ包括性は評価できるとしても、その理論が持つ限界を指摘しておくことも重要ではないだろうか。

こうした指摘を行うために、以下のような構成で議論を進めてゆきたい。まず、近年著名なトランスジェンダー研究家 V.K. ナマステ（2000）が指摘する、言説分析を使ったトランスジェンダー研究の問題点を取り上げる。そこで、トランスジェンダーに関して言説分析を行ったハウスマンの著作の問題点を検討することを通じて、言説分析がトランスジェンダーの日常世界に寄り添った手法ではないことを明らかにする。そして、クィア理論とトランスジェンダー研究を接合しようとするタイプの著名なクィア理論家の主張を検討し、なぜクィア理論がトランスジェンダーの日常性を把握することに難点を抱えているのかを明らかにしたい。

2 研究の問い——トランスジェンダーの日常生活にいかに関わりつくか

そこで、言説分析のような包括的視野に立った議論ができる理論を持ちながらも、何故クィア理論は、トランスジェンダーの日常生活にアプローチすることができないのかという問いが浮かび上がる。

本稿はこうした問いを研究目的とし、以下のような手順で考察を行いたい。

まず研究目的 1. クィア理論が想定する「性別二元秩序」「性支配の構造」の特性を明らかにすることである。そのため、クィア理論が、男をどのようなものとして定義し、女をどういった存在と定義していたのかということを検討・考察することも含まれる。これは、トランスジェンダーという存在を題材にクィア理論が研究を行う際に、クィア理論にとって男とは誰か、女とは誰なのかという性差の基準点を定めるクィア理論なりの思考法はどのような特色を有しているのかを検討するということでもある。

そして研究目的 1 に関する考察を通じて、2. クィア理論の認識枠組みが、現実のトランスジェンダーの人々の日常生活を明らかにしにくいのは何故かという研究目的に答えたい。

以上のような手順で検証を行うために、まずはクィア理論の理論的支柱である言説分析を使って、トランスジェンダーという存在が登場するまでの歴史経過を辿った医療史の B.

ハウスマンの著作を検討したい。何故この医療史の著作を検討するかと言えば、この著作はあまりに言説分析の手法に忠実であったため、言説分析の持つ欠点をより如実にあらわしているからである。

3 言説分析の欠点

ハウスマン（1995）の著作は、ハウスマン自身が認めているように、フーコーの系譜学から着想を得ている。

ハウスマンの系譜学的手法は、ハウスマンの研究に関して言えば、「ジェンダー・アイデンティティ」という医療言説が「トランスセクシュアル」という主体を作り、この主体は「ジェンダー・アイデンティティ」という医療言説を自身の主観（アイデンティティ）としたのだ、という図式になる。

同時にこの図式は、ジェンダーという医療言説が身体に介入する過程で、セックスという生物学的で自然化された観念が構築され、セックスという二元的な観念は性別二元制を強化する、という見解と結びついている。最終的に、ハウスマンは言説と身体、身体とセックスについて言及し、身体はセックスという言説によって構築されることによって、物質としての身体が成立するという結論にいたっている。ハウスマンの議論では、物質としての身体は言説によって作り出されたものであって、また身体をリアルなものとして感知する認識そのものも、言説によって構築されているという。最終的に、なまの物質を取り上げることは解かれざる問いに過ぎないとしている（Hausman 1995）。

こうした系譜学的手法は、個人の存在が歴史的状況のなかで拘束されている様相を検討することができるという意味で包括的だが、ハウスマンのように身体と主観（アイデンティティ）の存在そのものを言説による構築物としてしまうと、生物学的身体（しかもその身体は生理反応といった否定しえない事実をもたらすものだ）の存在自体が否定されてしまう。また「トランスセクシュアル」とされた人の主観（アイデンティティ）も言説によって構築されたものとみなされてしまっている。こうした言説によって身体、アイデンティティを構築物としてみなす考えは、構築主義の流れの中でも極端なものである。ハウスマンはホルモン投与のみ行い、かつ「男性らしい」「女らしい」振る舞い（ハウスマンはこれを「パッシング」と呼んでいる）を取らない「トランスジェンダー」を、構築された性別二元制度を破壊してゆく存在としている（Hausman 1995: 195）が、ここでハウスマンは「トランスジェンダー」というカテゴリーを、男一女という差異を破壊するという政治的プリンシプルを内面化した英雄主義的な個人として実体化してしまっている。これは、

男一女という差異を破壊するために、「トランスジェンダー」という差異を実体化して持ち出すという、きわめて規範性と思弁性の高い議論になってしまっている。

ハウスマンの言説分析の議論に対して、H. ルービン (2003) は、ハウスマンのような言説分析は、「トランスセクシュアル」とされた人々の主観的経験に注意をむけていないと指摘し、ハウスマンを批判している (Rubin 2003: 18)。また、S. ヒーンズといった論者は、言説分析は「トランス」とされた人々の主観を把握し損ねているし、また男一女という差異を構築物とみなすことによって結果的に差異の存在そのものを否定してしまい、差異を否定することなく位置づけることに失敗していると指摘する (Hines 2007: 25)。本来ハウスマンと共通した手法を取っていたスコットは、男一女という差異を容認しつつ、それを平等性の要求につなげる方法を取るべきだと指摘していた (Scott 1999=2004)。しかしこれらの論者の見解を鑑みると、系譜学的手法を徹底すると、差異を容認できずに否定するというロジックに陥ってしまうといえるであろう。

(この「3. 言説分析の欠点」のエッセンスにあたる部分は、平成 20 年度に提出した修士論文の第 2 章で展開したことがある (田多井 2009: 15-7))。

4 クィア理論によるトランスジェンダー論

これまで検討してきた言説分析の持つ規範性は、以下で検討するトランスジェンダーを題材にしたクィア理論によるトランスジェンダー論にも通底することである。もっとも、クィア理論といっても、様々な考えや相違をもつようになっているはずである。そのため、トランスジェンダーをクィア理論に内包して持論を展開している理論家の中でも、著名な理論家にもみ焦点をあてることで、クィア理論によるトランスジェンダー論の特色を把握したい。

トランスジェンダー研究家の V.K. ナマステ (2000) によれば、クィア理論にトランスジェンダーを応用した著名な理論家とは、2 名いる。この 2 名は、クィア理論によってトランスジェンダーにアプローチすることにそもそも批判的なナマステの著作で紹介されている。本稿ではナマステの指摘にもとづいて、クィア理論による著名なトランスジェンダー論を 2 つ検討したい (Namaste 2000: 65)。具体的には、K. ボーンスタインと R. ウィルキンスの著作を検討したい。ナマステの著作では、他に同じく著名なトランスジェンダーに言及した論者として L. ファインバーグがいるが、この著作は学術書でもなく、どちらかというとエッセイや自伝的要素の強い作品なので、本稿では取り上げない。

では、この 2 つのクィア理論によるトランスジェンダー論が持つ性差という差異に対す

る定義はどのようなものなのか、そこにどのような規範性があるのかを以下で検討したい。

これまで言説分析を使ったハウスマンの研究から、言説分析は性差という差異をどのように定義しているのかを検証してきた。検証では、言説分析から見た男女という性差は相容れない権力関係に置かれているものとして提示されてきた。では検証を進めて、クィア理論は性差という差異に存在する権力関係を解消するために、いかなるアプローチのヴィジョンを持っているのだろうか。クィア批評家、作家として著名な K. ボーンスタインの著作を手引きに、検証してみよう。

まず、ボーンスタインは、われわれが性差というものをいかに認識しているかについて、以下のように述べている。

ジェンダーのとりわけ狡猾な側面といえるものに、それが全く自然に作られた物事の状態だと信じさせられることによって、危険にも作り出された、抑圧的な階級制度になっている点がある。(Bornstein 1994=2007: 125)

以上のように、ジェンダーとはそれが自然な事物であるという装いを持つ抑圧的な制度だとされる。では、ボーンスタインは、いかにして性差という差異を定義し、この差異にひそむ権力関係の解消方法を提示しているのだろうか。以下で見てみよう。

男性か女性かという、一方か他方かによりできているジェンダーの階級制度の中で、一方を上位に置き、他方を下位に置く構造は、力の不均衡を必要としている。二元的なジェンダーの制度が存在し続け、活発に執拗に保持されているのは、二元的なパワー・ゲームが行われる場所だからである。それは、世界のおおよそ半分の人が、残りの半分に対して権力を持つ競技場なのである。

二元的なジェンダーの制度がなければ、男性と女性の権力の力学は終わるだろう。(Bornstein 1994=2007: 128)

ボーンスタインにとって男女という性差は、もはや消去してしまうもの、跡形もなく消滅させるべきものと考えられている。「性差そのものがなければ、男女の間の不平等は終わりを告げる」とボーンスタインは考えているのだ。そのため、ボーンスタインにとって、性差とは権力関係が具現化したものであり、性差そのものが権力関係として認識されているといえる。性差イコール権力関係というあまりに単純な図式は、以下の叙述からも見て取ることができる。

言い方を変えれば、「ジェンダーの平等」は矛盾した言い方なのだろうか？ジェンダーの平等を求める闘いは自己否定なのだろうか？ジェンダーには階級が内包されているのであり、階級は不平等を前提としている。ジェンダーの脱構築を求める闘いの方が、より早く目的地に到達できる。

しかし、不平等の背後に横たわる理由を見ようとするより、ジェンダー間の差異を維持しようとする人がほとんどである。その差異とは、私たちが差異であると決めたものでしかない。そして、時代や文化によって差異の一部が少し変わって行くとき、それをジェンダーの領域における進歩であると呼ぶ。しかし、ジェンダーそのものはまだ存在し続けているのである。(Bornstein 1994=2007: 135)

以上の叙述において、性差という差異の存在につきまとう不平等を解消するアプローチの大多数のあり方が、男女間の差異を維持した上で不平等を解消するという方法であるために、ジェンダーそのものはまだ存在し続けているというボーンスタインの批判が記されている。こうした「男女という性差は残したまま、男女の間に存在する権力関係を解消する」というアプローチは、ボーンスタインのように、男女という差異を権力関係が具現化したものとするタイプのアプローチではない。ボーンスタインはジェンダーそのものをなくしてしまうことによって、はじめてジェンダーという差異に組み込まれた階級制度がなくなると指摘している。

ここではじめて、男女という性差そのものの自体は権力関係に対して中立的だと考えるか、ボーンスタインのように男女という性差そのものを権力が具現化したものと見るかという対立軸が成立する。

どうしてこうした対立軸が出てくるのかといえば、それは男女という差異があり、なおかつそれが先天的であるという説に理論家が同意するか否か、という点に原因がある。もし、男女という差異が生物学的・生理的なレベルで存在するという認識を受け入れれば、社会的なレベルで存在する男女という差異を解消するという考えになる。他方で生物学的・生理的な差異そのものが、社会的に構築されたものと見れば男女という差異そのものを権力と見る考えになる。実際に、ボーンスタインは生物学的・生理的な男女差について以下のように述べている。

文化により強制される差異というものが存在しているから、差異について考えてみる必要がある。しかし、その差異は性別固有のものではないのである。男性と女性のいわゆる「生来的な差異」に焦点をあてることは、ジェンダー制度そのものの存在を

看過または否定することになり、それゆえジェンダーの制度を存続させてしまう。しかし、なくしてしまうべきなのはジェンダー制度そのものであり、ジェンダーという観念そのものである。それらが同時になくなるなら、差異は崩れ落ちるのである。(Bornstein 1994=2007: 136)

以上の記述に見るように、ここで生物学的性差の言及が出てくる。上記の記述では生物学的性差の存在を認めることは、その行為自体が性差という権力関係を延命させることだという主張がなされている。

ただ、ここで、クィア理論とトランスジェンダーの性のあり方とが衝突することに、ボーンスタインは気づいていない。というのは、ボーンスタインの言うように、クィア理論では生物学的性差は確かにジェンダーを延命させるものなのかもしれない。だが、トランスジェンダー（特にトランスセクシュアル）にとって、生物学的性差は生理反応のように性別違和をもたらす要因として存在する。だが、同時に性別違和は「自らの希求する性」に気づき、その希求する性に沿うように身体を変えてゆくきっかけを与える。ここで、大きな疑問が生じる。こうした「自らの希求する性」にこだわるトランスジェンダーの性のあり方は性差にこだわることであり、クィア理論の批判する範疇に入ることではないのか、ということである。性差にこだわることこそ、トランスジェンダーがトランスジェンダーたるゆえんであるとすれば、クィア理論はトランスジェンダーの性のあり方を徹底して否定しかねないものになる。そうしたことに、ボーンスタインは気づいていない。

ここまでボーンスタインの記述を検討しつつ、ボーンスタインが示す性差という差異に関する考えを抽出してきた。これまでの検討で指摘できるのは、ボーンスタインは、性差を権力が具現化したものとして考えている、という一言に尽きる。そして、性差自体を、つまり男女のふたつの差異を無くすことが、ジェンダーの問題への抜本的解決であると考えられている。これは非常にわかりやすい差異批判であり、多種多様なポスト・モダンの思想を使ってボーンスタインが示した答えであるということが出来る。ただし、性差にこだわることにトランスジェンダーの性のあり方の特徴があるとすれば、性差にこだわることを批判するクィア理論にコミットするボーンスタインは、自らの論理の破たんの可能性に気づいていないことになる。

ではこうした「男女という差異そのものを権力関係と見る」考えは、ボーンスタインと同じく、トランスジェンダーをクィア理論に含めて考える理論家の R. ウィルキンスにも通底した考え方なのだろうか。以下で検討してみよう。

まずナマステ（2000）が批判的にウィルキンスを取り上げた後年、ウィルキンスは別の

著書の中でジェンダーとは意味を産出するシステムなのだと定義する。ウィルキンスによれば、そこでは二つのセックスが「自然なもの」として意味づけられ、母なる自然、生物学的な男と生物学的な女、ジェンダーの二元体が再生産される。そして、「性同一性障害」もまた、二元的なジェンダーがセックスをコントロールするために作ったものとされる (Wilchins 2002)。

そしてこの意味を産出するシステムにおいては、二つのセックスは対等ではなく、男が普遍的で、所与のものとされる。他方で女は男性の定義にあてはまらない残り物——出産、謎——とされ、男に依存した存在であり、常に男にとって他者であるものとして定義される。この女という言葉は男をサポートするだけの存在にされてしまう (Wilchins 2002)。

こうしたウィルキンスの主張をまとめると、次のようになる。

まず、われわれは究極的には、女を男でないもの、ホモセクシュアルをヘテロセクシュアルでないもの、トランスジェンダーを正常なジェンダーでない意味を持つものとして話すことになる。それは勝者と敗者というヒエラルキーを作る (Wilchins 2014)。

以上のように、ウィルキンスは、クィア理論が提示した考え方を使いながら、男と女という二元的なジェンダーへの批判を行っている。ウィルキンスの考えの中核にあるのは、いかにして男と女という二元的ジェンダーを解体するかにあり、それゆえに「二元的 (binary)」という言葉がよくウィルキンスの著書に登場する。

これまでのウィルキンスの性差についての考え方を見ると、差異批判を行うことによって、男性ありきの二元的なジェンダーのあり方を、いかに解体するかという課題を設定して考察を進めているといえる。これも先述のボーンスタインと同じく、多種多様な「ポスト・モダン」と言われる思想を吟味した上で出した見解である。なおかつ二元的なジェンダーを解体することが、性差別を無くすことにつながるという考えもまた、ボーンスタインと変わりが無い。「性差自体を消滅させる」という点が性差別や性支配をなくす処方箋として考えられているという点で、両者は一致している。

そして差異というものが解体されるところにマイノリティの解放というユートピアを描いているという点でも、ウィルキンスとボーンスタインの思考法は変わりが無い。どういう点で変わりが無いといえば、繰り返すようだが、二元的とされる性差という差異そのものをあらゆる性差別や偏見の根源と見ているからだ。

だが、ジェンダーという差異を解体した後に残るユートピアとはどういう状態の世界なのか、どういった秩序づけのもとで異なる性のあり方をしている人々が共存するのかについては、具体的なヴィジョンはない。

だが、ボーンスタインとウィルキンスの主張の論理の問題点は、そうした具体的ヴィジヨ

ンのなさにあるのではない。両者の問題は、クィア理論の性差の解体という主張にコミットする一方で、性差にこだわる生き方がトランスジェンダーの性のあり方であり、クィア理論とトランスジェンダーの性のあり方のあいだに大きな溝があることに気づいていないことである。

5 結語

ここまでの議論をもとに、本稿の研究の問いに応答してみたい。

本稿の研究の問いとは、次のようなものであった。まず、1. トランスジェンダーを視野に入れて性差という差異を考察するクィア理論は、「性別二元秩序」や「性支配の構造」をどのように定義し、男とはどう定義され、女とはどう定義されるのかという性差の線引きのあり方を明らかにすることである。そして、2. そのクィア理論の認識枠組みと、現実のトランスジェンダーの人々の性のあり方や日常生活との落差を探ることであり、その理論の現実に対する有効性を考察することが、本稿の研究の問いであった。

この問いに対する応答とは、次のようなものである。まず、上記の1. について答えておこう。男女という差異は、①セックスという生来的な差異という概念にもとづく。②ただし、実はそうした生来的とされた性差は、既に権力関係を内包しており、もし生来的な差異としての性差を認めてしまえば、その権力関係を看過してしまうことになる。③男女という差異に内包された権力関係とは、男性を普遍的なもの、女をそれ以外のものとして定義することによって女性を周縁化する。④こうした権力を解消するには性差そのものを解体するというのが、性支配からの解放の処方箋として考えられるようになる。

以上が、1. トランスジェンダーを視野に入れて性差という差異を考察するクィア理論は、「性別二元秩序」や「性支配の構造」をどのように定義し、男とはどう定義され、女とはどう定義されるのかという問いへの応答である。

また、2. クィア理論の認識枠組みが、現実のトランスジェンダーの人々の日常性を明らかにできないのは何故かという疑問に、以下で答えておこう。

トランスジェンダーほど生来の身体(=生物学的性差)に執着する(執着せざるをえない)存在もない。というのも、生来の身体は、第二性徴を迎えると生理・自慰行為となって現れ、トランスジェンダーの「生来の身体とは異なる性」で生きたいという想いを喚起する。だが、他方でクィア理論には生物学的性差にこだわることは権力関係に巻き込まれることだという認識がある。そのため「性別適合手術」によって生物学的性差を変えらるというトランスセクシュアルの人々の意志は、クィア理論からすれば医療という権力装置に

回収されてしまい、結果的に男女という差異を再生産することだという見解につながりやすい。実際、「3 言説分析の欠点」で取り上げたハウスマンは、クィア理論家ではないものの、クィア理論の方法論である言説分析を使ってトランスジェンダーについて考察を行った結果、手術を志すトランスセクシュアルを「ジェンダーのカモ」(Hausman 1995: 140) とまで呼んでいる。ここでは、トランスジェンダーをクィア理論に含めて考える方法論が、もっともトランスジェンダーの抱く「性の希求」に対して鈍感だという皮肉な現象が起きている。

そこで、生物学的性差(セックス)に執着するトランスジェンダーの意思をクィア理論が批判的・否定的に評価することをやめることが、トランスジェンダーの意思や生活様式をよりよく理解するために必要になる。だがしかし、一般の人々が生物学的性差に執着する意思を批判的に検証するところに、クィア理論がクィア理論たる理由がある。そのため、生物学的性差に起因する性別違和を取り除くべく、ホルモン療法を受け、「性別適合手術」を受けようとするほどまでに生物学的性差に執着するタイプのトランスジェンダーの意思は、クィア理論の理解の範疇を超えている。そういった意味では、高額の医療費がかかるホルモン療法と「性別適合手術」を受けるために預金を作ろうとするトランスジェンダーの意思と日常生活は、クィア理論からは平板的な分析しか得られない可能性がある。以上が、2. クィア理論の認識枠組みが、現実のトランスジェンダーの人々の日常性を明らかにできないのは何故か、という疑問にたいする応答である。以上の応答を踏まえながら、今後いかにしてトランスジェンダーの日常生活を取り上げてゆくかを、最後に述べておきたい。

これまで言説分析を使った医療制度研究と、北米で著名なトランスジェンダーに特に力点を置くタイプのクィア理論家2名の見解を検討してきた。そこで明らかになったことは、次のようなことである。

それは、言説分析という優れた方法論をもってしても、トランスジェンダーのようなLGBとは異なるタイプの性的少数者が、いかにして日常生活を生き、生存しているのかという点にはスポットが当たらないことである。トランスジェンダーが生存するにはいかなる条件が必要かといった問題の探究は、言説分析を主流とするクィア理論から漏れ落ちてしまうと云わざるを得ない。具体的に言えば、日常生活を維持するための労働という問題が抜け落ちてしまうということである。そうした事態を解消するためには、クィア理論ではなくて、資本主義と性差との関連について説明能力を持つ理論を探し出す必要がある。トランスジェンダーの日常生活の中の「労働」問題は、資本主義と性差が交差する地点である。こうした事情を鑑みると、いわゆるポスト・モダンの思想の文脈で語られることの

多いトランスジェンダーについて考察すべき問題は、「資本主義と性差」に収斂してゆく。これはどちらかというと「モダン」の理論の問題圏にトランスジェンダーの労働問題が含まれることを示している。「モダン」の思想の影響を受けた議論にさかのぼった方がより詳細な考察ができるというのは、なんとも皮肉な事態だ。というのも、本来「ポスト・モダン」の理論で語られることが多かったトランスジェンダーだが、こと労働問題という日常生活に直接影響を及ぼす問題になると、「ポスト・モダン」の理論が経済的な事柄（労使関係、企業組織、職場のあり方）に疎いことが露見してしまうからだ。

ただ、こうした問題に取り組むには、クィア理論がそうだったように、「輸入」された思想や理論に無批判な形で頼るという経路を辿ってはならないということである。重要なのは、その理論が「輸入」される際に、できるだけ批判的にその理論を継承することではないだろうか。批判的に継承するためには、「輸入」された理論への批判が「輸入先」の国で存在するかどうかを読み解いたりする必要がある。あるいはその理論の先駆的業績が、既に過去の日本に埋もれたかたちで存在するかどうかを探るなどの手段がある。「輸入」された理論に重きをおいた議論を継承するだけでは、「輸入」された理論の欠点をも継承することにもなる。「輸入された理論」の普遍性を疑うことがまずもって重要なのではないだろうか。

参考文献

- Bornstein, Kate, 1994, *Gender Outlaw: On Men, Women, and the Rest of us*, New York: Routledge. (= 2007, 筒井真樹子訳『隠されたジェンダー』新水社.)
- Hausman, Bernice, L., 1995, *Changing Sex: Transsexual, Technology, and the Idea of Gender*, Durham: Duke University Press.
- Hines, Sally, 2007, *Transforming Gender: Transgender Practices of Identity, Intimacy and Care*, Bristol: The Policy Press.
- Namaste, Vivianne. K, 2000, *Invisible Lives: the Erasure of Transsexual and Transgendered People*, Chicago: the University of Chicago Press.
- Rubin, Henry, 2003, *Self-Made Men: Identity and Embodiment among Transsexual Men*, Nashville: Vanderbilt University Press.
- Scott, Joan Wallach, 1999, *Gender and the Politics of History*, Rev. ed, New York: Columbia University Press. (= 2004, 荻野美穂訳『増補新版 ジェンダーと歴史学』平凡社.)
- 田多井俊喜, 「『性同一性障害』として語られた主観性と生活世界の社会学」京都大学大学院人間・環境学研究科平成 20 年度修士論文.
- Wilchins, Riki, 2002 "A Certain Kind of Freedom: Power and the Truth of Bodies—Four Essays on Gender" Joan Nestle, Clare Howell and Riki Wilchins eds., *GENDERqUEER: Voice From Beyond the Sexual Binary*, New York: Alyson Books. 23-63.
- , [2004] 2014, *Queer Theory, Gender Theory: An Instant Primer*, New York: Magnus Books.

(たたい としき・京都大学大学院文学研究科非常勤講師)